

『フオアヴェルツ』誌と『経済学・哲学草稿』及び「ビュレノート」

— ジャーナリストとしてのパリのマルクス —

的 場 昭 弘

目次

はじめに

(一) ビュレとマルクス

(二) ゲオルク・ヴェーバーとマルクスとの関係

(三) ゲオルク・ヴェーバーの論文と『経済学・哲学草稿』

及び「ビュレノート」

小括

はじめに

最近の初期マルクス研究、とりわけバリ時代の『経済学・哲学草稿』(以下『草稿』と略)や「バリノート」⁽¹⁾に関する研究は、きわめて精緻になってきている。特にこの時期が、マルクスが古典派経済学を撰取した時期であ

ったこともあって、研究の多くは『資本論』成立史という形で、マルクスと古典派経済学者スミス、リカード、J・ミルとの関わりあいの中で展開されている。そのこと自体決して間違いではない。しかし、こうした研究視角は、『草稿』を『資本論』に引き付けすぎるために、当時のマルクスの置かれていた社会的立場、特にジャーナリストとしての立場を無視する結果にもなっている。そもそもこうした展開をもたらした最大の原因は、エングルスが『資本論』第2巻の序文で書いた「マルクスは、その経済学研究を一八四三年にパリで偉大なイギリス人、フランス人のものから始めた」⁽²⁾という証言を拡大解釈し、マルクスは、『資本論』に至る経済学研究をち

ようどこの時期に始めたという説を文字通り踏襲したことにあった。しかし、ここで明確に区別しなければならぬことは、経済学研究の開始とそのあり方である。マルクスは当時ジャーナリストであり、『経済学批判』は一つのテーマであったとしても、全体としてのテーマではなかったと思われる。そこで、ジャーナリストとしてのマルクスという観点から見ると、このエンゲルス説はかなり不十分であることが判明してくる。すなわちマルクスが、経済学を本格的に研究するためにスマイス、リカード等を学んだというエンゲルス説は、あくまで『資本論』成立への手がかりという点から出てきたことであって、これは必ずしも当時のマルクスの活動を充分反映していないのではないだろうかという疑問が生じるのである。はっきり言って、一八四四年当時のマルクスは『独仏年誌』、『フォアヴェルツ』(Vorwärts)といったジャーナリズムの世界の人物であり、そうした活動を抜きにした経済学研究などありえなかつたはずである。エンゲルスがバリ時代のマルクスを、当時の現実のジャーナリズム活動から引き離し、『資本論』に至る一過程としての側面を強調して以来、こうしたジャーナリストティック

な活動への言及が無視されることになったのである。もっとも、『独仏年誌』の編集(二月)を終えてから、『フォアヴェルツ』の編集(七月)に加わる四カ月の間は、直接のジャーナリスト活動から離れており、マルクス自身本当の意味ではジャーナリストではなかつたと言える。

しかし、実際には、彼はルーゲ、ベルナイス等と結びつきつつ、『独仏年誌』に代わる活動の場を求めて、バリのドイツ人社会を徘徊しており、けつしてジャーナリズムから離れたわけではなかつた。現に彼が執筆を計画していた『国民公会史』(三―五月)、『ブルノー・パウアー批判』(七月)、『国民経済学批判』(一八四四年二月一日レスケと契約)、『マックス・シュティルナー批判』(二月)は、当時のジャーナリズムと密接に結び付いていた問題であり、依然として彼の研究方向はジャーナリズムと密接に結び付いたとも言える。経済学を学んだのも、それが当時のジャーナリズムでの主要問題、『貧困』問題を検討するための大きな武器になりうると確信したからであり、経済学のノートを本格的に書いたといつても、それはジャーナリズムの批判の資料であつた公算も大きい。

こうした側面から見て、従来の『草稿』研究が、『フォアヴェルツ』⁽³⁾に載ったマルクスの論文や、ゲオルク・ヴェーバー (Georg Weber) の論文を詳細に検討しなかったことは、大変な手落ちであったように思える。本稿の主題である「ビュレ (Bühe) ノート」も、たんにマルクス自身の研究のためのノートとして書かれただけでなく、『フォアヴェルツ』でのさまざま問題を批判するために書かれたというのが、より真実に近いのかもしれない。また「バリノート」にある他のスミス、セー、リカード等のノートも、マルクスだけが使ったのではなく、ヴェーバーも使った形跡があることから、『経済学批判』のためのノートというだけでなく、『フォアヴェルツ』誌上での『貧困』問題批判の資料であった可能性も大きい。

さて本稿は、こうしたジャーナリストとしてのマルクスという観点から、特に「ビュレノート」と『草稿』と、『フォアヴェルツ』誌上のヴェーバーの論文との関係を追っていくことにする。まずここで検討されるべき文献は、『フォアヴェルツ』誌上に載ったゲオルク・ヴェーバーとマルクスの論文と、マルクスの「ビュレノート」

と『草稿』である。

(一) ビュレとマルクス

さてマルクスは、どのような経路を辿ってビュレの著作を知るに至ったのであろうか。この著作との出会いの時期、出会いの方法はブリュッセルまで続くマルクスの『貧困』問題への関心と深く結び付いていると思われる。ユージヌ・ビュレ (一八一〇—一八四二)⁽⁴⁾の著作『イギリスとフランスの労働者階級の貧困について』(以下『貧困』と略)は、一八四〇年にフランスの「政治科学アカデミー」(Académie des sciences politiques et morales)が、募集した懸賞論文として一等賞を授与されたもので、フランス、イギリスの貧困の実態を調査することにその主眼がおかれていた。この時の応募作品は、二二点であり、アカデミーの要求した内容は「貧困はどうやって起こるか、それぞれの国でどういう特徴を持つか、またその原因はなにか」というものであった。ビュレは、この授賞によって二五〇〇フランという大金を手にすることができたが、こうした大金の賞金が懸けられたのも、当時『貧困』問題が大きな関心を持

たれていたからであった。すでにビュレ以前にも、フランスでは「貧困」問題について数多くの研究が発表されていた。たとえば、ヴィレルム (Villermé)、『フレジエ (Fréger)』、ラファレル (Lafarelle)、『ルードン (Loudon)』、ヴィルヌーヴーバルジモン (Vilneuve-Bargemont)、『シヤンボラン (Chamboran)⁽⁵⁾』等の作品があげられるが、(ヴィルヌーヴーバルジモンを除き) いずれも「貧困」の実態調査の点ではすぐれていたが、国民経済学への理解とその批判的検討という点では、ビュレに及ばなかった。たとえばビュレは、次のような国民経済学への批判的検討を行っている。それは、リカード、セーに代表される当時の国民経済学への批判であった。彼は次のように国民経済学を批判する。——アダム・スミスの経済学は、幅広い社会問題を含んだバランスのとれた科学であったが、リカードの経済学は道徳的基盤のない富の科学という側面を全面に出すことによって、スミスの経済学の持っていた社会性を消滅させた。リカードの経済学は、「人間は無であり、生産物がすべてである」⁽⁶⁾。しかし経済学は富の科学ではなく、最大多数の幸福のための科学である。こうした人間を無視した国民経済学の特徴は、政

府の介入を認めない次の自動調整機構にある。例えば、セーは、労働の供給と労働の需要が変動し、賃金が上昇しても、賃金上昇は労働者の人口増を招き、それによって賃金は長期的には低落し、また逆に、賃金が労働者の人口増大によって下落しても、それは労働者の人口の減少を招き、長期的には賃金は上昇すると主張する。しかし、現実には、こうした調節機構は働かず、労働者の失業と、低賃金、貧困が増えつづけている。セーの欠陥は、労働者を、ひとつのものと考えている点にあり、それを克服するには、国民経済学は、労働者を生命をもった生き物として扱わなくてはならない。さらに、国民経済学には、道徳的基準が必要であり、自動調整機構に委ねられる自由競争は、資本家にとってよりも労働者にとって損である。——以上がビュレの基本的考えであるが、そこには国民経済学批判とそこから帰結される国家による貧困の打破という思想があった。

さて、マルクスはどうやってビュレの『貧困』の存在を知ったのであろうか。⁽⁷⁾ 一般に「貧困」と経済学との関係をマルクスに教えたのは、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』(以下『大綱』と略)であると言われている。

これは一八四四年二月に『独仏年誌』に載ったわけであるが、少なくとも一月には編集者マルクスのもとに渡っていたであろうから、マルクスは経済学を研究し始めるまえにエンゲルスに影響されたというのは明らかであろう。しかし、この論文の中には、ビュレは引用されておらず、マルサス批判で有名なイギリスの経済学者アリソン (Alison) の著書 (*The principles of population, and their connection with human happiness*, London, 1840) が引用されているだけである。したがって、マルクスが『大綱』をつうじてビュレの著作を知ったというのはあり得ない話であろう。四四年当時パリでは『貧困』問題について人々の関心が高く、『両世界評論』 (*Revue des deux mondes*) では、フォウシヤ (Faucher) が、イギリスの諸都市の『貧困』の実態を紹介していたし、マルクス自身『聖家族』でとりあげるシュエ (E. Sue) の『パリの秘密』 (*Les mystères des Paris*) もパリの貧困の実態を描いており、しかも『フォアヴェルツ』でもその売行きが、紹介されるほどにフランス人の間で読まれていた。この著作がビュレや、ヴィルヌーヴ・バルジモンの著作を使った事は言うまでもない。マルクスがこ

の小説を読み、ビュレの著作に興味をもったことは充分に考えられる。また、フランスの『貧困』問題を研究していた社会主義者たち(ブルードン、P・ルルー、F・トリスタン、ベクル、ブラン⁽¹⁰⁾)から、この著作を紹介されたのかもしれない。しかし一つの考えられうる推論としてもっとも正しいと思われるのは、シュルツ (Stulz, W.) の著作『生産の運動の理論』をとおして知ったという推論であろう。一八四四年三月『独仏年誌』に送られたヘス (M. Hess) の『貨幣体論』にシュルツの『生産の運動』が引用されており、マルクスはその本を四月頃購入し、次ぎにこの本の末尾に掲載されているビュレの著作を購入したのではないかと思われるからである。いざれにしてもこれらの説は仮説の域をでないものではある。しかし、マルクスがこの著作を選択したことは、彼が『貧困』問題という視点から国民経済学を批判検討する上で重要な選択であったと思われる。それは、『パリノート』、『草稿』の中で国民経済学を批判する際に用いられた、資本の利潤対労賃という関係をビュレの『貧困』がすでに展開していたからである。実はすでに触れたように、エンゲルスがマルクスに与えたと言われている経

経済批判の方法（自由競争批判、貧困と人口法則批判）も四年前にビュレが展開していた方法でもあった。この天折の経済学者ビュレは、シスモンディの信奉者として経済学と社会主義の関係を最も早く分析した人物の一人で、少なくともこの段階では、後に述べるようにマルクスに大きな影響を与えた人物と言える。

(11) G・ヴェーバーとマルクスとの関係

ゲオルク・ヴェーバーの論文とマルクスの『草稿』との関係を最初に指摘したのはマイヤー (G. Meyer)⁽¹¹⁾であった。しかも、彼は二人の論文が類似していることから、ヴェーバーとは筆名で本当は詩人のヴィールト (G. Weirth)ではないかと指摘した (メーリンクにいたってはエンゲルスではないかとさえ考えている)⁽¹²⁾。しかし、このヴェーバーがキール (Kiel)出身の医者であり、実在した人物であったことは書簡やスバイの報告などから証明されている⁽¹³⁾。このゲオルク・ヴェーバーが実在の人物であることを最初に指摘したのは、シラー (Schiller)であるが、この指摘によって、ゲオルク・ヴェーバーはマルクスと当時最も親しかった友人であることがわかつ

た。⁽¹⁴⁾ ウェーバーについて今まであまり知られていないので、ここで若干の紹介を行うことにする。⁽¹⁵⁾

ゲオルク・ヴェーバーは、一八一六年キールの名家に生まれた。彼の父は、キール大学医学部の創始者ゲオルク・ハインリッヒ・ヴェーバーであった。父ハインリッヒの当時の医学はまだ救貧対策の要素を持っており、ハインリッヒもキール市の貧困問題に関心を示す社会改良家であった。ハインリッヒには、最初の妻との間にフリードリッヒ・ヴェーバー (一七八一—一八二三) という息子がおり、このフリードリッヒの家系が父ハインリッヒの跡を継ぐことになった。そのためゲオルク・ヴェーバーがパリにいた頃は、フリードリッヒの長男フェルデinand (一八一二—一八六二) が家業を継いでいた。ゲオルク・ヴェーバーは、キール、ボンのギムナジウムを出て一八三五年キール大学の医学部に入学することになる。一八四一年キール大学で博士号を取得し、その年キールを離れた。そして一八四四年の暮に、キールに帰ったことになっているが、キールの住民登録には一八四八年まで彼の名はない。この七年の間こそ彼が労働運動に参加する時代であるが、その原因や動機についての詳

細はわかっていない。キールに帰って以後も彼は、キール市の労働運動に参加し、ブリュッセルの共産主義通信委員会との関係を持ち続ける。しかし、四八年革命後デスマークとの戦争に参加し捕虜になって以後、労働運動との関係は切れてしまう。その後一八六一年までアメリカで暮らし、一八九一年十二月六日亡くなるまでマルクスや労働運動との関係は一切なかったようである。

ヴェーバーが『フォアヴェルツ』に加わったのは、ベルナイスが編集に携わるようになった七月からであった。

『フォアヴェルツ』は、それまでの自由主義方針を止め、社会主義者や急進的インテリゲンティアにその門戸を開いた。こうした編集方針の変化は、『独仏年誌』が頓座し、ジャーナリズム活動の場を失っていたルーゲ、マルクス、ベルナイス等に幸いした。すでにプロイセン政府と密通していたボルンシュテット(Bornstedt)⁽¹⁷⁾が四月に『フォアヴェルツ』を離れており、編集者ベルンシュタイン(Börnstein)は、ベルナイスをつうじて、ルーゲやマルクスと連絡を取る。彼らが新聞の編集を引き受けた時、編集方針は、出版の自由やドイツの統一といったドイツ自由派の綱領ではなく、(宗教、国家、所有か

らの)人間の解放であった。七月の段階で、マルクス、ベルナイス、ヴェーバーは、国民経済学批判、宗教批判を展開し、人間解放への道を模索していた。

ベルナイスの編集長就任は確かにマルクス派の侵入を容易にしたが、マルクスの意見が取り入れられるようになるのはこの新聞が集団編集体制をとっていたからであった。⁽¹⁷⁾ 集団編集体制とは、それぞれが個人の名前で勝手に記事を書くのではなく、一つの記事について徹底した討論を行った後、個人の名前で記事を発表するという編集方針であった。マルクスは、ベルナイス、ヴェーバーと連絡を取りつつ、自らのノートを資料として編集部へ持って行き、それをヴェーバーやベルナイス等に回覧し、それによって意見を統一し、新聞の編集を牛耳るようになっていく。当時の状況をベルンシュタインは次のように語っている。「週に何度も行われた編集会議のことを懐かしく思い出す。この会議の時、私の編集室の中にはルーゲ、マルクス、ハイネ、ヘルヴェーク(Herwegh)、バクーニン、ヴェーバー、ヴィールト、エンゲルス、エヴェルベック(Ewerbeck)、ピュルガース(Bürgers)等が集まった。——この編集会議の時には、十二人から十

五人の人々が集まり、ベッドや鞆の上に腰掛けたり、立ったり、歩き回ったりして、タバコをもうもうとふかしながら討論に夢中になっていた。⁽¹⁸⁾まさにこうした状況の中で、それぞれが持ちよった材料を一人一人が検討し、討論し、推敲していったのであろう。しかし、この討論の席には、ルーゲのようにすでにマルクスと意見が対立する者もいたわけで、マルクスと彼らにまでノートや『草稿』を見せたわけではないであろう。だからマルクスが見せたのは多くともベルナイス、ヴェーバーの（この当時エンゲルスはイギリスにいた）二人であったと思われる。

ヴェーバーは、七月から八月にかけて四篇の論文を書くわけであるが、それらの論文は多くの点でマルクスから示唆を受けていたと思われる。論文の中に引用されている作品が、ビュレ、シュルツ、セー、エンゲルス、ヴァイトリンク、シエークスピアのものであることは、すでに指摘されているが、⁽¹⁹⁾一九八一年刊行の新メガ版の「バリノート」とこれらを対照することによって、この引用がマルクスのノートといかに対応しているかを知ることができる。ヴェーバーは、かなり細かくマルクスの

所有する本やノートを使って引用しているようであり、この二人の関係は八月エンゲルスがバリに来るまで続く二人の関係が疎遠になるのは、ヴェーバーがキールに帰る十月からである。この頃からマルクスの親友の座をエンゲルスが占め、しかも、共同の作品『聖家族』の執筆がはじまり、ヴェーバーへのマルクスの情報提供はなくなる。

それではマルクスは一体どういう形でヴェーバーにノートや、『草稿』、本の書き込みを見せたのであろうか。マルクスがすでに出来上がった『草稿』をヴェーバーに渡し、それによって彼に理論的示唆を与えたとは考えにくい。なぜならマルクスは、その時まだミルヤリカードなどをヴェーバーに教えていないようであるし、マルクス自身みずからの論文にミルヤリカードを引用しておらず、まだ『草稿』やノートは進行中の段階であったと考えられるからである。ヴェーバーは、七月末に最初の論文を書く際、第一草稿は知っていたとしても、第三草稿は知らなかったと思われる。

それではなぜマルクス自身直接筆を取らなかったのであろうか。すでにプロイセン当局がマルクスをマークし

ていたとしても、『マンハイマー・アーバント』新聞には、マルクスとルーゲが、『フォアヴェルツ』を牛耳っている」と書かれていたし、マルクス自ら二本の論文を書いていたので、あえてカモフラージュする必要はなかったはずである。考えられる事は、この段階ではまだ経済学の研究に充分満足していなかったということであろう。しかし、それならばマルクス以上に不十分なヴェーバーの論文をなぜ差しとめなかったのであろう。それともヴェーバーの論文は、マルクスの分身であって、そこに引用されているビュレの論理は、当時のマルクスの経済学の水準であったのであろうか。そして八月末に現れるヴェーバーの「貨幣」に見られる内容の変化も、マルクス自身の変化であったのであろうか。いずれにしても、この変化は七月末から八月末にかけてであったと思われる。さらにそのあたりを確定すべくヴェーバーの論文とマルクスの論文及びノート、『草稿』を比較してみよう。

(三) ゲオルク・ヴェーバーの論文とマルクスの『経済学・哲学草稿』及び「ビュレノート」

ヴェーバーが書いた(署名入り)論文の中でマルクス

と関係するものは四篇である。「黒人奴隷と白人奴隷」(Negersklaven und freie Sklaven) (七月二十日)「プロイセンの公的慈善」(Officielle preussische Wohltätigkeits) (八月三日)「アルザスのオスターヴァルトコロニー」(Die Colonie Osterwald im Elsass) (八月十日)「貨幣」(Das Geld) (八月二十八日)。これらの論文はベルナイスが編集長に就任してから書かれており、マルクスの思想的影響が大きかった事は間違いない。ヴェーバーが、これらの論文で使ったビュレ、シュルツ、スミス、セーの作品等は、マルクスのノート及び『草稿』での引用と類似しており、この影響力はかなりのものであったと思われる。しかもマルクス自身、ヴェーバーの論文を受けるかのように『プロイセン国王と社会改革—プロイセン人』に対する批判的論評」(八月七日、十日)と「フリードリッヒ・ウィリアム四世の新しい内閣の政策の例解」(八月十七日)を書いていて、二人の思想的関係はかなり密接であったと思われる。

さてこれらの論文とマルクスのノートと『草稿』の類似性についてであるが、第一にあげられるのがビュレの著書を初めとした引用の類似である。以下詳述すること

図 1

<p>「黒人奴隷と自由奴隷」</p> <p>ピュレから</p> <p>「正しい報告によれば六〇〇万アイ ランド人のうち三〇〇万人が飢餓 に苦しんでる」 Buret※p.204.</p> <p>セーから</p> <p>「セーは、資本は日常的なよりはっ きりと言えは法によつて認められた 盗みであつたと説明する。」 Say※Tome I,p.136.</p> <p>「労働者は生活に必要なものを充分 作れなければ、彼らの多くは死んで しまう。」 <i>Ibid.</i>, Tome II,p.157</p> <p>「スミスから</p> <p>「資本の所有者は、その所有によつ て、労働者および彼らの生産物を支 配し、真の統治権を得る。」 Smith※p.61.</p> <p>シュルツから</p> <p>「一八三五年蒸気と水とを動力とす るイギリスの紡績工場で働いたのは 一八三五年八〜十二歳二〇八五八人、 十二〜十三歳のあいだのもの三〇八 六七人、そして最後に十三〜十八歳 のあいだのもの六〇二〇八人であつ た。」 Schulz※S.70f.</p>	<p>マルクスのノート及び「草稿」</p> <p>「一八三五年の調査によれば三〇〇万 人が全く食料をうばわれている」ピュ レノート」 著 MEGA I,2,S.55f.</p> <p>「セーノート」 <i>Ibid.</i>, S.306</p> <p>第一草稿、『経済学哲学草稿』 城塚登訳 岩波書店 二九頁</p> <p>「労働者は彼自らの生活に必要なもの を自分のものに出来ない：彼らは死滅 する。」</p> <p>「セーノート」 <i>Ibid.</i>, S.314.</p> <p>「スミスノート」 <i>Ibid.</i>, S.339.</p> <p>第一草稿 前掲書 三九〜四〇頁</p> <p>第一草稿、前掲書、三三頁</p>
---	---

※ Buret, E., *De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France*, 1840, Tome I.

Say, J.B., *Traité d'économie politique*, 1817.

Smith, A., *Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations*, par Garnier 1802, tome I.

Schulz, W., *Die Bewegung der Production*, 1843

で判明してくるが、二人の引用の一致はかなりのものであり、それは偶然の一致の域をはるかに越えている。このことからヴェーバーはマルクスの所有する本か、彼のノートを見たのではないかということが推察される。第二は二人の論理の類似である。この一致はマルクス自身の思想形成と微妙に関係しており、『草稿』の成立過程を知るためのひとつの論拠ともなろう。以下その類似を各論文それぞれについて具体的に追ってみることにする。

(a) 「黒人奴隸と白人奴隸」

図一の対照表で示されているように、ヴェーバーの引用とマルクスのノートおよび『草稿』の引用は大変似ている。もちろん彼のドイツ語訳は必ずしもマルクスのドイツ語訳と一致しているわけではないが、引用部分の切り方、接続の仕方はほとんどマルクスのものと同じである。

また、引用の一致あるいは類似とともに、論理構成が「第一草稿」によく似ていることに気が付く。ヴェーバーのこの論文はプロレタリアートがいかに奴隸化しているかを説明したものであるが、その批判は次のようなものであった。

国民経済学は独占に代わって自由競争を強調するが、その競争は逆に資本の所有者と資本を持たない労働者との間の競争を作り出す。資本の所有者は、資本を所有することによって、生産物と労働への支配権を獲得する。労働者は労働しか生計の手段をもたず、資本の所有者の意に従わざるをえない。だからこそこの両者には厳しい競争（すなわち自由競争）がある。この競争の結果労働者に与えられる労賃は、生活手段の価値にまで引き下げられる。それは、労働者が商品とおなじような法則すなわち需給の法則に支配されていることを意味する。労働者の賃金の価格が下がるのは、労働者の供給がその需要を上回るからである。労働者の供給を増やすのが他の業種の労働者の参入であるとすれば労働者の敵は他の労働者ということになる。資本の所有者はこの敵対関係を利用し何人かの労働者を抜駆けさせてより一層働かせる。確かに平均賃金以上に働いた労働者の賃金は、一時的には上昇する。しかし、その結果総生産物が増大し、全体の生活手段の価値は低下するので長期的には彼らの賃金も低落する。しかも、全体の労賃は再び減少するとしても、一度増大した労働時間は減少することはない。資本

<p>「プロイセンの公債懸賞」</p>	<p>「エロルから 「一八三〇年ロンドンのシテイの五 〇軒の家族は、救済費を支払うために ペントを始めて彼らの持ち物すべてを 売らねばならなかった。」 Bretsch, op. cit., p.151.</p>
<p>「エロルから S. 555.</p>	<p>「一四〇〇万人の人口を知して一七 六年には税は一七〇三六ポンドス ターリング、一八〇二年四七八〇八九 一ポンドスターリング、一八二二年 一八七七八五ポンドスターリング、 一八三〇年一〇〇〇万以上」 Ibid, p.1454. (ただし数字は違)</p>
<p>「エロルから」Ibid, p.555.</p>	<p>「北の地区では五〇〇〇四一人の労働 者達でござんだ。その移住費用として その地区の人々は二八四〇ポンドス ターリングの費用を払った」 Ibid, p.172. (ただし数字は違)</p>
<p>「エロルから」Ibid, S. 555.</p>	<p>「クアークウスに入るにはいくつかの 承認条件がある。母と子の分離、家の 中で面性の分離」Ibid, p.167.</p>
<p>「エロルから」Ibid, S. 556. (FingがWeibとなっている)</p>	<p>「西や南の農業区域五一四一人の住民 が貧困から逃れて、北の農業地区にや つて来た。この費用は一八四一四ポ ンドスターリングであった。」「エロル 」Ibid, S. 556.</p>
<p>「エロルから」Ibid, S. 557.</p>	<p>「一八三六年の冬は特に厳しく、おそ く貧困であつた。レムニ公の街で 委員会が開かれたとき一四九人の貧民 が助けを求めていた。その内一八八 人クアークウスへ入るよう求めた。 しかしそれを受けたのは六人だけで、 その他は雪の中へと失望して戻つてい わねた。同じような申し出を八人が受 けた。しかし二日以内に、その内三人 は出ていった。Ibid, p.177. (ただし数字 字は違)</p>
<p>「エロルから」Ibid, S. 561. (六月一四日となっている)</p>	<p>「一八〇八年七月五日にナボレオンは 食費が罰として罰せられる法令を最後 に施行した。Ibid, p.228 た。Ibid, p.220. (ただし数字は違)</p>
<p>「エロルから」 五百の法令によると食費は罰せられ る。Ibid, S. 561 「批判的論評」MEW, Bd. I, S. 399.</p>	<p>「一八三〇年ロンドンのシテイの五 〇軒の家族は、救済費を支払うために ペントを始めて彼らの持ち物すべてを 売らねばならなかった。」 Bretsch, op. cit., p.151.</p>

図 2

の所有者のみが、この増えた労働時間の恩恵に与ることになる。こうして資本の所有者対労働者との競争は資本の所有者に有利に展開する。

こうした論理は、第一草稿の労賃欄、資本の利潤欄とよく似ている。すでにエンゲルスが『大綱』で所有批判と競争批判を行っていたので、ヴェーバーもそれを参照したともとれるが、エンゲルスはまだマルクスのように資本の利潤対労賃の競争という形で経済学を把握していないわけであるから、むしろマルクスの『草稿』及びノートを参照したと考えるほうが正しいであろう。この類似は次の論文になるとさらに一層はつきりしてくる。

(b) 「プロイセンの公的慈善」

この論文は、すぐ後に出るマルクスの論文「批判的論評」と対象、批判の方法が似ており、ふたりが共同して論文を書いたともとれる。

図二の対照表を見てわかるとおり、ヴェーバーの引用のほとんどはマルクスのノートと一致する。しかし、彼がマルクスのノートをそのまま引用していないことは、数字の間違い、翻訳の違いでも明らかである。マルクス自身も「批判的論評」のなかのビュレからの引用の場合、

彼の「ビュレノート」の引用と一致しておらず、彼自身もノートからではなく、本から直接引用した形跡もある。ただ全体としてみた場合、マルクスがノートから離れた自由な引用が多いのに対し、ヴェーバーはマルクスのノートに忠実な形での引用が多い。このことは、ヴェーバーはビュレを実際には読んでおらず、マルクスのノートあるいは本への書き込みから引用したにすぎないことを証明しているとも言えるであろう。一方この論文自体の論旨は直接『草稿』と関係せず、マルクスの論文「批判的論評」の方と関係している。この論文の対象は、マルクスが「批判的論評」で問題にするのと同じフリードリッヒ4世の慈善対策批判であった。彼は次のような批判を行う。フリードリッヒ4世がシレジアで行っている慈善対策はなぜ失敗するか。イギリスやフランスの実例がその失敗を暗示しているからである。イギリスでは国家の慈善対策のため、救貧税が高くなり、それが一層貧困を助長させる原因となった。やがて議会はその負担を避けるために救貧税を廃止し、慈善を廃止し、貧民を働かせるためのワークハウスを作った。フランスでも、大革命直後国家による慈善対策が行なわれたが、イギリス

図 3

<p>「アルザスのオスタヴァルトコロニー」 オランダの開拓農民の例 <i>Burei, op.cit., p.295.</i> 全体の展開でもある小土地所有者と大土地所有者の関係 土地所有を分割すべきかそうでないか。 (イギリスの例)</p>	<p>マルクス「ビュレノート」及び「草稿」 「ゴレノート」第MEGA, op. cit., S.569. 第一草稿、前掲書、七二一―七五頁 「大土地所有者と小土地所有者との間の事情は、大資本と小資本との間の事情と同じである。」から始まり、小土地所有者は大土地所有者に吸収されるという部分まで 第一草稿、前掲書 七八一―八三頁</p>
--	--

同様国民の負担となり、とうとうナポレオンは、乞食を一掃するために乞食を禁止する法を施行するにいたった。マルクスの「批判的論評」でもこれとほぼ同じことが語られているが、マルクスの場合の中心課題は、慈善で対処しきれないくらいにドイツのプロレタリアートが確固たる存在として発展していることを証明することにあった。そのためマルクスは、慈善対策に代わる新しい道をはっきりとプロレタリアートの解放という形で出している。ヴェーバーは、慈善対策はプロレタリアートに対

しては何の意味もなさないことを主張しながらも、プロレタリアートの解放については語らない。逆にそのことは、マルクスとヴェーバーの二つの論文が補完関係にたっていたことを示している。特に資料の取り扱い方について、マルクスはヴェーバーが引用しなかったケイ (Kay) の『イギリスの最近の教育振興政策』(Recent measures for the promotion of education in England) をビュレの本から孫引きしており、^(註)ヴェーバーとの引用の連係もうまくいっていたように思われる。

(c) 「アルザスのオスタヴァルトコロニー」

この論文は、第一草稿の地代欄に類似した内容を持っている。論文が短いため、また引用もあまり多くないため類似箇所は少ないが(図三)、ここにあげられた引用及び論理の類似性からみて、マルクスの第一草稿の「地代論」に関するマルクスの説明を参考にして、この論文は書かれた可能性がある。特に論理の類似に

ついでには注目しなければならぬ。内容はアルザスで行われている開拓地政策がなぜ失敗するかということであった。その内容を追っていくと次の具合である。我々の市民的、法的関係の基礎は所有であり、その基礎の上で貨幣の支配、競争が展開している。したがって、コロニーが私的所有に基づいて人々に土地と労働を与えるのであれば、当然競争と貨幣の支配に直面せざるをえない。

すでに農業においても、土地所有の大小によって競争原則が貫徹しているので小土地所有者は、大土地所有者によって危機に瀕している。コロニーの本来の目的は、産業の競争から生じた貧困をなくすための対策であったのだが、すでに農業にまで競争の法則が進んでいるので、資本を持たない小土地所有者の集まりであるコロニーは、所詮こうした競争の中で生き残ることはできない。

マルクスも、『草稿』の地代欄で大土地所有者は借地農が作る利子である地代を蓄積し、巨大な生産力を我が物とできるのに対し、小土地所有者は生産手段の購入に対し自らの小資本を使わざるをえず、その結果大土地所有者に吸収されてしまうと述べている。しかもこの展開のねらいは、小土地所有者はプロレタリアート化すると

いうこと、農業でも工業と同様に両極に分解するということの説明にあった。マルクスはそこでその解決としての私的所有者の根を断ち切ることを主張する。ヴェーバーの論理展開もほぼこの地代欄から借りてきていると思われる。ただヴェーバーが私的所有の廃棄にまで進まないで、急進的で最終的な変革という抽象的な言葉で濁している点が異なっている。

(d) 「貨幣」

この論文は八月末(二八日)に発表されたものであるが、前の三つの論文に比べて時期的にも論理的にも異なっている。しかもこの論文の内容は、マルクスの第三草稿の『貨幣』の内容に酷似しており、引用されている文献もはやビュレではなく、マルクスが『草稿』で引用しているゲーテやシェークスピアの章句(引用ページ、引用したドイツ語訳も同じ)であり、論理的展開に若干の違いが見られるものの、大変よく似ている(図四参照)。ヴェーバーはこの論文を書く際に第三稿の貨幣を読んだか、あるいはそれをマルクスから聞いたかのどちらかであることは間違いないであろう。

さて次にヴェーバーの貨幣論の論理とマルクスの貨

図 4

<p>「貨幣」 シェークスピア『アテネのタイモン』 Tieschの訳 「黄金か。貴い、キラキラ光る……諸 国の人民をだます娼婦だ。」 「おまえは追従上手の國王殺害者だ…… ……動物どもがこの世界の支配者となる まあ。」 ゲーテの『ファースト』からの引用「む く犬」の部分 中に引用された Morelly の本 Morelly, Code de la nature, 1841. Mannon による言葉</p>	<p>マルクスの『草稿』 第三草稿 前掲書 一八〇〜一八一頁 第三草稿 前掲書 一八二〜一八三頁 第三草稿 「馬の部分 前掲書 一七九頁 この本はマルクス所有の本であった。 第一草稿、前掲書 二〇頁</p>
---	---

幣論の論理とを対比してみよう。ヴェーバーは次ぎのよ
 うに展開している。貨幣の本質は、マルクスが『独仏年
 誌』で言うように、あらゆるものの抽象的価値であって、
 その抽象によって、人間の抽象物として神が創られたの
 と同様に、物神的価値をもつ。現代の宗教こそ貨幣であ
 りこの抽象性こそ貨幣の悪であり、貨幣そのものが悪で
 あるわけではない。したがって貨幣を廃棄することは、
 この抽象性を廃棄することである。ヴァイトリンクの貨

幣廃棄は、ただ貨幣に代わる公益時間という抽象物を置
 き換えるだけで、その抽象性そのものを批判しない。そ
 れでは抽象性を創出するものは何か。それは私的所有で
 あり、それを廃棄することこそ重要な課題である。もし
 て、必要なものが必要に応じてえられるような共同体的
 所有こそその廃棄である。しかし、他面で貨幣が存在す
 る以上、抽象性という点で逆に私的所有を創り出す可能
 性もあるので、貨幣自体もやはり廃棄しなければならな
 い。

以上のヴェーバーの論理は、物
 神性としての貨幣、私的所有批判
 という二点においてマルクスのそ
 れと類似している。しかも表現の
 方にも若干の類似がある。たとえ
 ば、ヴェーバーが、「貨幣は神的
 な力である」と述べたのに対し、
 マルクスは「貨幣は目に見える神
 であり、一切の人間的なまた自然
 的な諸属性をその反対のものへと
 変ずるものであり、諸事物の全般

的な倒錯と転倒である。⁽²⁴⁾と述べ、ヴェーバーが「貨幣」という抽象物が欲求を創り出す社会から、人間そのものが欲求を創り出す社会への移行⁽²⁵⁾と述べるのに対し、マルクスは、「貨幣が人間の能力をつくる社会から人間自身⁽²⁶⁾がその能力をつくる社会」と述べている。ただ二人の差異は、マルクスが貨幣の物神性を強調するに對し、ヴェーバーが貨幣の物神性よりも、貨幣批判、私的所有批判といったより具体的なものへの批判を全面に出していることである。

小括

以上本稿はジャーナリストとしてのマルクスという観点から、三つの点(ビュレの著作とマルクスとの関係、ヴェーバーとマルクスとの関係、ヴェーバー論文と『草稿』、「バリノート」、「批判的論評」との関係)を分析してきた。こうした分析から理解できることは、第一に『草稿』、「バリノート」、「批判的論評」全体をとおして、ビュレの『貧困』の影響がかなり色濃く見られるということである。この影響は、ブリュッセル時代まで続く「貧困」問題の研究まで及んでいて、マルクスは、ブリ

ュッセルでもビュレの『貧困』のノートをとっている。第二に当時マルクスは、積極的にジャーナリズム活動の世界に入り、その傍らで経済学のノートをとっていたということがある。すなわち、このことは経済学の研究が主で実践的活動が従であったのではないということに興味している。最後に、ヴェーバーの論文とマルクスの作品との類似から次の三点のことが言えるであろう。(a)マルクスとヴェーバーは思想的に近い友人であったということ。しかし、この友情関係は、ヴェーバーが医者であったということ、故郷キールに帰らねばならなくなったことによつて長く続かなかつたようである。(b)マルクスの経済学研究(「バリノート」および『草稿』)が、『フオアヴェルツ』という新聞をつうじて(たとえヴェーバーを通してであつたにせよ)発表されていたという事実。これは、『草稿』がたとえ将来『経済学批判』という形でケルンのレスケ(Leske)から出版される前のノートであつたとしても、その一部がジャーナリズムの世界で発表されていたということの意味するわけであつて、この事実は草稿の意味を知る上で大きな資料とならう。(c)『草稿』と「バリノート」のそれぞれの執筆時期がこ

の『フォアヴェルツ』の論文を通じて推定できるといふことである（これについては別の機会に言及した）。

- (1) 「ビュレノート」は以下のように分類される。(一) ヌヴ
マヌール・ヌヴヌノートル (二) ヤール・ヌカル・ヌノートル
(三) スヴヌノートル (四) ヲヤノンキン・リカード・ヌノ
ノートル (五) ヲカロント・ヌレウキール・ヂヌサト・ド・ト
ラシノートル (六) シメオン・ケジマンター・リスマンノートル
(七) ヲトノートル (その外、リカード・ヌレウキールにだけて書か
れたと思われるキトネ・ヌール・ローネ・ヌノートルもある
が) 新 *MEGA. IV/2*, 1981 参照。

(2) エンゲルス『資本論』二巻 邦訳 *Mary-Engels-Werke*
(ズル *MEW* 参照), Bd. 24, S. 14.

(3) 『ノキトキニシ』と題しては *Vorwärts*, Pariser Si-
gnale aus Kunst, Wissenschaft, Theater, Musik und
geselligen Leben, Ab 3. 7. 1844: Pariser Deutsche Zei-
tschrift, Hrg. H. Börnstein unter Mitarbeit von C.
F. Bernays, A. Ruge, H. Heine, K. Marx und Fr.
Engels. 1844-45, Mit einer Einleitung von W. Schmidt,
Leipzig, 1975. を使用。

(4) エンゲルは一八一〇年十月六日、パリ南東の街テロワ
(Troyes) に生まれた。彼は、一八四一年マルジュリアで
亡くなったのである。研究活動は短くものであった。彼は、
その間『ツリヒ・フランク』*Courrier Francais*, 『シムル

ナル・ヂ・ヤロノスト』*Journal des économistes* に担
躍した。また『A. ブランキ *Bianqui* ヲウ』『国権論』
の翻訳にも加わった。

- (5) Villermé, R. L., *Tableau de l'état physique et moral
des ouvriers employés dans les manufactures de coton,
de laine et de soie*, 1840, Fregier, H. A., *Des Classes
dangereuses de la population dans les grandes villes,
Paris*, 1840, Lafarelle, F. F., *Du progrès social au profit
des classes populaires non indigentes*, 1839, London, C.,
*Solution du problème de la population et de la substa-
nce*, 1842, Villeneuve-Bargemont, *Histoire de l'économie
politique, ou études historiques, philosophiques et religieu-
ses*, 1841, Chamborant, C. C., *Du paupérisme, ce qu'il
était dans l'antiquité, ce qu'il est de nos jours*, 1842.

(6) Buret, *De la misère des Classes laborieuses en An-
glettre et en France*, 1840, tome 1., p. 6.

(7) エンゲルスとマルクスの関係や著作の題名などに
Andler, Ch., *Introduction historique et commentaire, Le
manifeste communiste*, 1901 邦訳 岩波書店 F. Mehring,
Ein methodischen Probleme, *Die Neue Zeit*, XXJg. I,
Nr. 15, 1901. に詳しい紹介がある。最近では
Cottier, G., Une source de K. Marx et Fr. Engels, *Nouva
et Velera*, II 1956. などの文献がその関係に触れている。
又、エンゲルスとマルクスの関係についてはその後の文

- 敵がある。Stein, L. は「ユートピアの『貧困』(1841) 非特二一面的色彩を帯びてゐるが、マンハトムのユートピアの著作はその裏面ではある。」と云つてゐる。『Lehrbuch der Volkswirtschaft』1858, S. 184. 又 Rannus, P., *Friedrich Engels als Plagiator, Die Ueberschraft des Kommunistischen Manifests*, 1906. によつて文庫がある。
- (8) Faucher, L., *Etudes sur l'Angleterre, Reuues des deux mondes*, Tome 4, 1843, Tome. 5, 6, 1844.
- (9) *Vorwärts*, Nr. 4, 1844.
- (10) この何人かはユートピアを用ひてゐる。Proudhon P.-J., *Systèmes des contradictions économiques ou philosophiques de la misère*, 1846, tome I, p. 221. Leroux, P., *De la ploutocratie, Reuue Indépendante*, tome 4, Septembre pp. 540, Oct., p. p. 113. Tristan, F. L., *Union ouvrière*, 1843, p. 3. 又内容的にはマンハトンの「ヤンキエにユートピアは影響してゐる。マルクスは「五月二四日にマンハトンの講演を聞かしてゐる。『独仙年誌』の連絡先はマンハトンの住所を使つてゐる。その他「*L'Atelier, l'Artisan*」にユートピアの著作が取り上げられた。
- (11) Gustav, Mayer, *Der Untergang der "Deutsch-Französischen Jahrbucher"* und des Pariser Vorwärts, *Archiv für die Geschichte des Socialismus und der Arbeiterbewegung*, 1913, S. 433.
- (12) Mehnig, F., *Marrx-Engels-Nachlass*, Bd. II, S. 34 f.
- (13) 著者のキースの隠名 Wermuth-Sieber, *Die Communisten-Verschöerungen der 19 Jahrhunderts*, Zweiter Teil, Berlin, 1854, S. 134. 及び一八四五年十一月二二日のキースの「マンハトンのキースの著書(『Der Bund der Kommunisten, Dokumente und Materialien, Bd. 1, 1983, S. 255.』)
- (14) Schiller, P., Georg Weber, ein Mitarbeiter des Parrisers "Vorwärts," *Marrx-Engels-Archiv*, vol. 2, Frankfurt a. M. 1928, S. 465.
- (15) マーヴェの「ドゥーア, W., *Die Kieler Gelehrten familie Weber in Schleswig-Holstein*, Inaugural-Dissertation, Kiel, 1960. 参考。
- (16) 「キースの著書」の「Koszyk, Kurt, Adalbert von Bornstedt, Spitze! und Publizist, *Publizistik*, Bremen, no. 3, 1958. 参考。
- (17) 後にマンハトンの「編集方針を交へ、単独責任体制を導入してゐる。Börnstein, *Fünfundsiebzig Jahre in der Allen und Neuen Welt*, Leipzig, 1881, S. 356.
- (18) *Ibid.*, S. 351.
- (19) Grandjone, J., *Marrx et les communistes allemands à Paris 1844, 1974*, pp.165—185.
- (20) *Mannheimer Abendzeitung*, Nr. 173, 1844.
- (21) 索引を最初に掲げた文献は Meek L., *Marrx Engels on Malthus*, 1955. 参考。

- (22) Shakespeare, *Dramatische Werke*. Uebers. v. Schlegel, erg. u. erl. v. Tieck, Berlin, 1833. Goethe, *Volksstückig Werke in 40 Bd.*, 1827—30.
- (23) *Vorwärts*, *op. cit.*, Nr. 69.
- (24) マルクス『経済学・哲学草稿』前掲書、一八三頁。
- (25) *Vorwärts*, *op. cit.*, Nr. 69.

- (26) マルクス『経済学・哲学草稿』前掲書、一八五—一八七頁。
(本稿は一九八五年一月一二日経済学史学会関東部会での報告の一部を基礎にしている。その際貴重なコメントを下された山中隆次氏、宮崎厚一氏、吉沢芳樹氏、津田匠氏、田中正司氏の御好意にあらためて謝意を表したい。)
- (一橋大学助手)